

前回のあらすじ

定在波対策後、余計な共鳴がなくなり解像度が上がったが、その反面、音の勢いや低音感が減り、物足りない音となってしまう。そこで、背面に背圧抜きのスリットを開ける事で、低音の量感と解像度のバランスが良くなり、最終的に納得のいく音にまとまった。これでもう不満はない。いよいよ、最終バージョンの製作にとりかかった。製作期間はエーシングも含めて2か月程度かかるので、今月は、今までやってきたことを振り返り、邪道式スピーカー工作について考えたい。

第1回目

デザインからスピーカーを設計する

吉野 運命と割り切って、デザインから作り上げていく。やっぱり自分が「いいな」と思うスピーカーって見た目からじゃないですか。だから今も後悔はないですね。

岸 まずは、デザインが気に入らないものを

邪道スピーカー最終バージョンに向けて鋭意製作中

買っわけがないからね。しかし、多くの人は作るときは、バックロードやバスレフなど、何式にするかと、様式から入る。そして、面を取ったり、球体にしたりと、音優先で作ること、だいたいの似たようなものに集約されていく。でも邪道はそこをあえて無視し、違う方法で好きな音を探す。今のスピーカーって定位がしっかりしていて、音が立体的に細分化される。それが今風のいいスピーカーの条件だけど、吉野さんはそうではないスピーカーの良さを感じている。

結論 デザインからスタートしたことで、結果的に音の独自性を手に入れる事ができる

第2回目

容積を聴きながら微調整

吉野 MDFで仮で作った箱に入れて、容積を聴きながら決めていきました。

岸 この時の経験は凄かったです。板の位置1cm単位で音が変わるなんて、聴いて体験しなければわからないことです。音がこれだけ変化するというのは、今回の様々な実験の中で一番の驚きでした。容積を合わせて、ユニットの能力が確認できれば、それはとても有効です。

吉野 容積の変化で、どのように音が変わるかを体験できたので、傾向がわかるようになったのは大きいです。ちょっと低音が足りないとか、ボワつくなんて時に、容積を微調整できる。逆にここつまづくと、どうあがいてもいい音はできない。1本で実験したことも良かったですね。

岸 1本の方が、音に集中できて、分かりやすかった。

んだけど、響きは変わらない。パーチクルは音が駄々洩れで拡がるけど、フォーカスが甘い。普段、当たり前のように、合板を使ってきたけど、その特徴を掴めてよかった。

岸 余計な響きを一切付加せず、ユニットの音のみを出すのが、今のスピーカーの傾向だと思っけど、箱全体で鳴らす良さを感じさせられた。

吉野 昔のビンテージスピーカーの名機は、米松の無垢材が多かった。そのせいなのかも知れない。

岸 素材による音の違いを知れたことは、大きい経験だった。

結論 無垢材はスピーカー全体で鳴らすのに向いている。

第6回目

塗装の違い、仕上げでの音の違い

吉野 オイル仕上げ、ニス仕上げ、ペンキ仕上げの3パターンを聴きました。

岸 世の中の製品はほぼウレタン塗装です。オイル仕上げの場合、素材の音がダイレクトに出るので難しいです。

吉野 オイル仕上げはMDFでもパーチクルでもいい結果が出たので、仕上げとして間違いないですね。

岸 無塗装よりは、圧倒的に良かったですね。素材感を引き出す。表面の塗装の問題だと思っんですね。

結論 仕上げは、オイル塗装が素材の良さを引き出す。

第7回目

オール無垢キャビネット

吉野 いよいよオール無垢材のキャビネット

連載

新感覚オーディオクラフト

俺流スピーカー！
邪道を往く

第10回
今までの実験を振り返る

アクロージュファニチャー 岸邦明×ステレオ編集部 吉野

アクロージュファニチャー <http://www.acroge-furniture.com/>

結論 後々、条件は変わるにしても、容積は最重要。試作機で、聴感を頼りにベストなポイントを知っておくと、いいスピーカーが出来上がる。

第3回目

ツイーターにコンデンサを追加し、セッティングを考える

吉野 ツイーターをコンデンサの数値を変えながら聴いていきました。

岸 ツイーターから出てくる音ってこれっぽちという音なんだけど、フルレンジと合わさると、明確に音が変わる。それが違和感がないところを探す。ここも重要というか、吟味しないと、ツイーターをつける意味はないですね。ユニットが増えれば増えるほど、その調和を図るのは難しいんなんじゃないか。

吉野 これもやっぱり、比較試聴していかないとわからない世界でしたね。数値だけ見ても音の微妙なつながりは掴めませんから。

岸 位置も重要でしたね。下のユニットとうまく混ざる位置っていうのがあるんですね。

結論 実験では安価なコンデンサで、いくつか値を用意して、聴きながら決定すると良い。位置も重要。

第4回目

ホーンツイーターを埋め込む

岸 ツイーターがエンクロージャーに収まって一体になった方が、音がまとまった。よくツイーターだけエンクロージャーの上に乗っかってるやつがあるじゃないですか。あれには違和感を感じてました。本来、音楽は一体

みたけど、卵バックほど効いたものはない。解像度が上がりつつも、無垢の良さを殺さなかった。

結論 卵バックは今のところ定在波対策には有効。

第9回目

裏板にスリット

吉野 最終的に低音が物足りなくなると、裏板にスリットを入れました。内圧がへったのが、ユニットからの音全体がストレスフリーな感じになりました。

岸 いよいよ完成度が上がりましたね。スリットで低音が出たし、音の解放感もより出て、より自然な音になって。もう不満も探せなくなっている。もういいんじゃないのって。

吉野 それでいいよ、本番に行くことになったわけですね。

結論 背圧抜きは、ユニットの動きに対しても有効。

第5回目

バッフルの木材を聴き比べる

吉野 パーチクル、ラワン、フィンランドバーチ、メーブル無垢のバッフルを聴き比べました。

岸 メーブルの音離れのよさ、これはまさに吉野さんが目指している方向性ですね。音が前に飛び出してくるようになった。音が音楽になった。音自体は締まったけど、倍音が発生して窮屈な感じがしない。スピーカーから音が出る感じがなくなった。空間を満たしつつ、フォーカスもしているという相反すること、無垢を使うことで実現した。

吉野 無垢材の良さが確認できてよかったです。ラワンからフィンランドバーチへと交換していくと、音のフォーカスは上がっていく